

今週のメニュー

■ [トピックス](#)

◇PVC News No. 96を発行しました

塩化ビニル環境対策協議会

■ [随想](#)

◇古代ヤマトの遠景〔番外〕(14)

木下 清隆

■ [編集後記](#)■ [トピックス](#)

◇PVC News No. 96を発行しました

塩化ビニル環境対策協議会

3月11日に塩化ビニル環境対策協議会（JPEC）は [PVC News No.96](#) を発行しました。
No. 96号の構成は以下の通りです。

◎ [トップニュース](#)

「エコプロダクツ2015」出展レポート（VEC/JPEC）

－「身近なエコ素材PVCで安心・安全・快適な社会の実現」をテーマに－

◎ [シリーズインタビュー/さきがけびとにきく](#)

アップサイクルで社会に貢献

－高付加価値のモノづくりと障害者支援、環境保護を繋ぐ

[VVV] ヴィークラフトの独自性－

[VVV] ヴィークラフト代表 坂井 久美子 氏

◎ [リサイクルの現場から](#)

本邦初、再生塩ビ敷板を開発した(株)LINK PLANET

－電話回線用の電線被覆をリサイクル。

－板材の世界に「環境性」のコンセプトを導入－

◎ [インフォメーション1](#)

「PVC Design Award 2015」展示会の会場から

－東京、名古屋、大阪、福岡で開催。独創的作品に来場者注目！－

◎ [インフォメーション2](#)

代官山 蔦屋書店に、アワード入賞作品「amiTIE」が登場！

－ソフトPVCで編んだ新感覚ファッション！進む、アワード受賞作の商品化－

◎ [海外事例紹介](#)

ミラノ国際博覧会2015の話題から

パビリオン建材に塩ビが一役

－解体後はリサイクルの事例も。欧州塩ビ協会のニュースレターが紹介－

◎塩ビ最前線

今でも進化中。塩ビ製防水ウェアの最新情報

—(株)ジンナイに見る製品開発の今。

ファッション性の高い製品づくりへ、新たな動きもー

◎広報だより

- ・奈良県の中学校理科の先生を対象にプラスチック出前講習（VEC）

掲載記事をいくつかご紹介いたします。

「さきがけびとにきく」はヴィークラフトの坂井さんをインタビューしました。坂井さんは包装材や布地の端材を利用し、ショッピングバッグやポーチなどを製作するアップサイクルに取り組んでいます。

2月6日(土)には箕面市の企業や子供会、大阪大学の環境サークルの学生たちと一緒に「GOMIで宝物を作ろう」というイベントを開催し、さまざまな材料で飾りや小物づくりをしました。ポーチを作るコーナーには小学生も参加し、細長く切った洗剤のパッケージを何重にも編み込んで作品を作っていました。

ボルネオ島の自然環境を守るために設立されたボルネオ保全トラスト・ジャパンにもワークショップからの収入を寄付するなど多彩な活動を行っています。

「インフォメーション」は昨年のPVC Design Award2015で入賞作品が代官山の蔦屋書店で展示されていることを紹介しています。

今回蔦屋書店で展示されているのは「amiTIE」で編むをコンセプトにしたネクタイです。軟質塩ビにグラデーション印刷を施し短冊状にしたものを編み込んで作られています。

「塩ビ最前線」ではレインコートを紹介しています。

レインコートと言えば野球場などでみる透明なレインコートが有名ですが災害などで復旧に携わる作業員の方の防水ウェアの主力素材として塩ビが使われています。

現在新しい製品として空調ブルゾンに力を入れています。この製品は小型のファンを内蔵することにより外気を取り込み、汗を蒸発させることにより涼しく快適な着心地を保てる高性能なレインウェアです。

『PVCニュース』は[JPECのホームページ](#)から、最新号、バックナンバー共にご覧いただけます。

ご購読を希望される方は、[こちら](#)まで、送付先・TEL・希望部数などをご連絡下さい。

■ 随想

◇古代ヤマトの遠景〔番外〕(14)

木下 清隆

<前回とのつながり>

「櫛玉命」の秘密を探るために、今回は『伊勢国風土記』にまで分け入ったが、未だ秘密は解けていない。櫛田神社の祭神は、当初は櫛玉命だったとの伝承が存在していた等、謎は深まるばかりである。今回は、大若子命の謎解きの続きであるが、学者の説の解明で些かややこしい。

ここで、更に一つの疑問が残る。それは、『倭姫命世記』を出口延経が引用しながら何故、大若子命説を説かなかったかという疑問である。これに対する解答としては、世記の中に明示的に櫛田神社と大若子命を結びつける記述がないこと、風土記由来の櫛玉命説を否定出来るほど『倭姫命世記』が信頼されていなかったこと等が考えられる。世記が偽書とされていたことは先に説明したとおりである。それでも、伊勢神宮の外宮神官としての出口延経は、世記の中に櫛玉命が出て来る一節があることから、そこを引いて櫛玉命説の補強としたのかもしれない。



伊勢神宮 外宮（遷宮前）

ところが、出口延経のこの櫛玉命説は橋村正身^{まさのぶ}の『神名帳考証再考』（明和六年、一七六九）によって否定されてしまう。その根拠はこれまた『倭姫命世記』である。出口延経と橋村正身との世記に対する態度は、前者が櫛玉命に関する限り曖昧であるのに対し、後者はこれを絶対の書と見なしている。橋村正身は、『神名帳考証再考』（神祇全書第四輯、同朋舎 一九七一年復刻）の中で、倭姫命世記について、

「我神宮に五部の秘記有、其内倭姫命世記を除きし外は、文義において古にたがへる所有て悉く真なりとも云がたし、故に近頃尾州の吉見左京幸和といふ者説弁を著す、其云処理なきにしもあらず、然ども吉見氏不学にして、其言猥劣汗下、これに対して弁明すべきにあらず、（中略）世記の書たる、上古太神宮本記と云古書上下二巻ありて、其上巻を紛失せしかば、残編に前後を加筆して、後人は是編述し、倭姫命世記と号す、故に古本の終に、太神宮本記下と記せる六字を遺せり、これが加筆を刪去て見る時は、国字遣いにしへに叶ひ、古代の書たる事疑ふべからず、…」

と述べている。冒頭に、我が神宮、とあるのは橋村正身本人が外宮の権禰宜だからである。内容の結論は、神道五部書の内、倭姫命世記は太神宮本記の残編に前後加筆して成ったものであるが、この世記のみが古代の書であることは疑いが無い、と云ったものである。

この中で正身は激しく吉見幸和を批判しているが、世記こそ最も信頼出来る旧典と考えている正身にとっては当然のことであろう。世記と太神宮本記との関係は前述した御巫清直の著書の基本をなすものであるが、正身も同様のことを述べている。時代的に正身の生誕は、正徳四年（一七一四）で清直より約百年早く、このことから、倭姫命世記の太神宮本記残編説は相当古い時代から伝承されていたと考えられる。

このように橋村正身は倭姫命世記を一つの判断基準に据えて、出口延経の『神名帳考証』を修正し、『神名帳考証再考』を著わした。この中で正身は櫛田神社所在地と祭神について、

「倭姫命御櫛を落し給ふ川を櫛田と云、川を田といふは、此辺の竹川を竹田と云例なるを、今の俗川の字を添て呼なり、祀る神は、考証に、櫛玉命とす、櫛は奇^{くし}にて、伊勢津彦^{おい}の一名なれば、櫛の義に不由、いはんや世記を錯て曲説をせんや、御経行の地に社定給ふ事例、前に同じ、」



伊勢 櫛田神社

と述べている。この文は極めて難解で、一読しただけでは意味が通じないが、あえて其の大意を述べれば次のようになろう。

「倭姫命が御櫛を落とした川を櫛田と言う。川を田というのは、この辺りでは竹川を竹田という例がある。今では田の下に更に川の字をつけて呼んでいる。(櫛田の近くに櫛田川が流れており、このことを指している) 櫛田神社の祭神は『神名帳考証』では櫛玉命、一名伊勢津彦になっているが、この場合の櫛は奇であって、伊勢津彦の一名だから、櫛田神社の櫛とは関係が無い。『倭姫命世記』の中で太神御経行の地に社が定められた場合は、その場に参り相した地主神等が必ず祀られるものであり、その事例からここの祭神は、大若子命である。」



櫛田川

と云ったところである。本文後半に、何も祭神名が出て来ないのに何故、祭神が大若子命になるのかは、橋村正身が『神名帳考証再考』の他の場所で次のように述べていることからの類推である。即ち、

「凡太神御経行の土地、櫛田社、魚見社の類のごとき、暫も留まりましませし跡には、社地設けし事世記に分明なれば、強て其神名を正すに及ばず、……狭田国生神社は…太神御経行の地にて、速川彦命参り相し事世記に見えれば、速川彦命を後に祀れる也、……」

と述べ、天照大神の行幸先での神社の創建と、その祭神の関係を明確にしている。要するに、倭姫が天照大神の御魂(鏡)と共に訪問した先々で神社を定めた場合、その祭神は、その時参り相していた地主神等である、というものである。この見解は、なぜそうなのかは説明されていないが、結論として、本考で先に検討したものと同一の内容となっている。

以上のような理由から、橋村正身は櫛田神社の祭神は大若子命であるとした。この正身の説がその後定着することになったと、櫛田神社由緒書に記されているが、国学者等における認識の変化については、由緒書の通りであろうと思われる。

(つづく)

この「古代ヤマトの遠景」に対し、ご意見・ご感想を頂ければ幸いに存じます。>> [\(筆者\)](#)
「古代ヤマトの遠景」: [バックナンバー](#)

■ 編集後記

東日本大震災から既に5年の歳月が経過しました。震災直後は危機意識が高く、「非常持出」を準備したり、非常用保存食品を購入したりしましたが、5年も経つと非常食の保存期限が切れてしまったままになっているなど、震災直後の意識がかなり薄らいでいる自分を発見します。

防災意識を保つことはかなり困難を伴いますが、日本ではどこにいても自然災害に遭う危険性があることを考えると「天災は忘れたところにやってくる。」という格言を常に自分に言い聞かせなければならぬと思っています。(ヨッシー)

■ 関連リンク

- [メールマガジンバックナンバー](#)
- [メールマガジン登録](#)
- [メールマガジン解除](#)



◆編集責任者 事務局長 高橋 満

■東京都中央区新川 1-4-1

■TEL 03-3297-5601 ■FAX 03-3297-5783

■URL <http://www.vec.gr.jp> ■E-MAIL info@vec.gr.jp